アーサー・ウェーリーの朝顔斎院解釈

—『源氏物語』の西洋における受容（1）—

太　田　素　子

要　旨

西洋で『源氏物語』がどのように受容されているかというテーマの一環として、本論では、アーサー・ウェーリーの英語訳を取り上げ、登場人物の一人である朝顔斎院を、彼がどう解釈したかを考える。源氏の求愛を完全に拒否する数少ない女性の一人である朝顔の心理を、原文とウェーリーの英訳を対比して読むことにより、ウェーリーが朝顔を自己意識の確立した西洋的な女性として解釈している構造を、彼の用いる 'determination'、'refuse to yield oneself to' などの一連のキーワードに着目しながら検証していく。

キーワード：源氏物語の翻訳、アーサー・ウェーリー、朝顔斎院、'determination'、'refuse to yield oneself to'

はじめに

『源氏物語』はこれまで、各国語に翻訳されてきた。その中でも最も多くの人々に読まれてきたのは、ウェーリーとサイデンステッカーの英語訳であろう[1]。ここでは、アーサー・ウェーリー（Arthur Waley）の英語訳を取り上げ、『源氏物語』の西洋における受容について考えていきたい。従来、『源氏物語』の英訳というと、議論の中心となるのは誤訳の問題であり、これについてはかなり検討がなされてきた[2]。しかし、本論では、今まで比較的議論されてこなかった、英訳と原典の比較を通して見えてくる、ウェーリーの日本理解と西洋的視点に着目していきたい。

この膨大な物語を読み解く上で、ここでは登場人物の一人である朝顔[3]を取り上げる。彼女は、源氏を巡る多くの女たちの中で、空蝉とともに源氏を拒否する数少ない女性で

ある。この意志のはっきりした女性をウェーリーがどう解釈して英訳しているかが、本論のテーマである。これまで朝顔は、藤壺宮に対する源氏の思いと重なり合って登場し、又、紫の上の嫉妬を引き出す存在となることで、紫のゆかりの女性たちに深い関わりを持つと解釈されてきた。[4]

朝顔に関する昨今の日本の研究を概観してみると、1960年代までの、成立論、構想論の隆盛と行き詰まりを経て、1960年代には、登場人物の心理と物語の文脈を照射することで、朝顔斎院を文学的に考察する方向性が示される。[5]その後、源氏の朝顔への執着は「藤壺宮を求めての魂の彷徨」ととらえられ、[6]さらに、80年代にはいると、朝顔に関する論文はふえて、藤壺宮や紫の上と重ね合わせない、朝顔斎院論も多く書かれる一方、成立論も見直され、視点論、語り手論、賀茂神への信仰論など多彩なアプローチが試みられた。90年にはいって論文数は減少するものの、桃園邸異郷論、「永遠の過去に住む姫君」朝顔などが書かれ、又『源氏物語』全体の中で「朝顔」の巻の位置づけがなされ、「朝顔」の巻を第一部の転換点と捉えるようになる。さらに2000年代には、「〈異化〉の方法――朝顔巻詩論」といった論文も書かれている。[7]

従来、このように位置づけられてきた朝顔であるが、源氏の求愛を、拒む意志を持ちながら拒みきれなかった藤壺宮、又、自分の意志を持たない幼いうちに源氏の妻とされ、選択肢を与えられずに源氏と関わりつつ最終的に彼を拒む紫の上に対して、朝顔は、紫のゆかりに限りなく近い位置にありながら、終生、自分の意志で源氏との恋愛関係を拒み続ける、きわめて自分の意志のはっきりした女性であった。当時としては珍しいタイプのこの女性を、自己意識が確立した近代西洋の翻訳者ウェーリーがどう解釈し捉えているかを、彼の訳文から検討していきたい。特に、朝顔に藤壺宮や紫の上を重ね合わせて憧れる源氏の視点ではなく、朝顔の側の心理の描かれている部分を取り上げて検討する。朝顔が、賀茂の斎院となる「賢木」巻を一つの区切りとして、前半後半に分けて考えていく。

1．朝顔の姫君――「賢木」巻以前

「賢木」巻以前の朝顔は、桃園式部卿宮の息女という高貴な身分に生まれ、本文中でも姫君（英訳では princess）と呼ばれ、父の後ろ盾のもと、源氏の正妻にもふさわしい地位にあった。

朝顔が初めて登場するのは、「帚木」巻で、雨夜の品定めの後、源氏が紀伊守の屋敷に方違えに行った折である。源氏は、隣の部屋の女房たちのうわさ話が聞こえてくるのを、もしや自分と藤壺宮のことが噂になっているのではないかと不安を覚えるが、実は自分と朝顔の噂であったという場面である。[8]朝顔の気持ちについては一切語られていないので、ここでは本文引用はしないが、源氏と朝顔の関係についての定説に触れておき

たい。

源氏と朝顔の馴れ初めは物語には描かれていない。二人の関係は噂話として「帚木」巻で突然語られる。「朝顔奉りたまひし歌」の内容や二人の間に存在するはずの過去など、具体的なことは一切分からない。二人の間の男女の関係の有無についてははっきりせず、ただ源氏が姫君に歌と朝顔を贈った事実のみが、噂という不確かな情報によって提示されている[9]。王朝時代、朝顔の花とはその名に負う「朝の顔」の連想から、男女逢瀬の翌朝という艶やかな陶酔を想起させつつ、一方では、朝花開き夕べを待たずしてしぼむはかない花と捉えられることが多かった。このように「朝顔」は男女の関係を暗示するので、この二人は「帚木」以前に一度だけ男女関係があったとする説が有力だが、反論もある[10]。ウェーリーは登場人物紹介で朝顔を、'Courted in vain by Genji from his 17th year onward' と朝顔の拒絶を暗示する。少なくとも「帚木」巻以降、朝顔が拒絶し続けたことは確かである。

次に朝顔の登場する「葵」巻で、初めて朝顔の心中が語られている。源氏と関係を結んだ高貴な女性、六条御息所が、今では源氏のつれなさを嘆いていることが宮中に知れ、院の耳にも達することになる。この噂を聞いた朝顔の気持ちは次のようにが語られる。

> かかる事を聞き給ふにも、朝顔の姫君は、「いかで、人に似じ」と、深う思せば、はかなき様なりし御返なども、をさをさなし。さりとて、人にくく、はしたなくはもてなし給はぬ御気色を、君もなほ、「ことなり」と思しわたる。（葵巻、318－9）

ウェーリーはここを次のように訳している。

> Among others who heard of the business was Princess Asagao. Determined that she at least would not submit herself to such treatment, she ceased to answer his letters even with the short and guarded replies that she had been in the habit of sending to him. Nevertheless he found it hard to believe that so gentle-mannered a creature was thinking unkindly of him and continued to regard her with devoted admiration. (155)（下線筆者、以下同じ）

ここで、朝顔が「いかで、人に似じ」と真剣に思う、この「人」とは六条御息所を指す。六条御息所の苦しんでいる噂を聞いて、自分はああはなりたくないと身にしみて思うのである。六条御息所はかつての東宮妃で、高貴な身分である。朝顔も桐壺院の弟桃園式部卿宮の娘として、高貴な身分にプライドをもっている。六条御息所に対しては、同情がないとは言えないが、むしろ自戒をうながし、ああはなりたくないという気持ちの方が強い。原文で朝顔は、六条御息所という「人」のようになりたくないとあるのを、ウェーリーは、「このような扱いに屈するまい」との決意表明に訳している。「このような扱い」（such treatment）が何を指すかは、原文ほど明確ではない。六条御息所のように源氏からつれない扱いは受けたくないのか、それとも人の口の端にのぼって哀れまれ

たくないのか。前段の解釈からすると後者の可能性が高い。しかし、いずれにせよ、ウェーリーは原文よりはるかに強い調子で朝顔の決意を語る。「『いかで、人に似じ』と深う思せば」という部分についてウェーレーは、「深う思せば」を訳するのに、'determined'（決意する）、「いかで人に似じ」を 'she...would not（強い意志の would not）submit herself to（屈しない）such treatment' という言葉を選んでいる。ここから見えてくるのは、朝顔の意志の強さである。源氏が 'gentle-mannered creature' として朝顔を捉え、常に都合のよい思いこみから思いを寄せ続ける様子と対比しつつ、ウェーリーはここで、自分の意志を貫こうとする女性として朝顔を解釈している。そして、彼女を表すキーワードとしてウェーリーが用いるのが、'determine' であり 'not submit herself to' なのである。自らの選択で源氏を拒絶する強い意志と、源氏を受け入れることは屈することであるという気持ちが、ウェーリーの描く朝顔の意識の基本にある。何に屈するのかについては、ここでは、源氏を受け入れた場合、その後に来るであろう彼の心変わりによる冷たい扱いであり、棄てられた女への世間の冷たい視線であると指摘するにとどめる。このような周囲の眼を気にする心理は、自らの強い意志で相手を拒絶する態度と一見そぐわないように見える。しかしこの周囲の眼への意識は、ウェーリーの解釈した日本人らしさの属性と考えられる。西洋的な意志の強さと、周囲を気にするという彼の考える日本人らしさをかねそなえる女性として、ウェーリーはこの時期の朝顔を解釈している。尚、サイデンステッカーはこの部分を 'Determined that she would not share the plight of the Rokujo lady, she refused even the briefest answer to his note.'[11] と訳している。「深う思せば」を 'determined' と訳し、強い意志の 'would not' さらに 'refuse' を用いるところは同じだが、「いかで人に似じ」のところは「六条御息所の窮状を共有したくない」（she would not share the plight of the Rokujo lady）と訳し、より原文に即している。周囲を意識して「屈したくない」と訳するのは、ウェーリー特有の朝顔解釈と言える。

同じ「葵」巻にさらに朝顔に関する記述がある。新斎院御禊ぎの日に、行列に供奉する源氏の美しい姿を父と共に見物する朝顔の心中が語られる。目の前を通る源氏の美しさを隣にいる父の桃園式部卿宮が絶賛するのに対して朝顔は次にように思う。

> ひめ君は、年頃きこえ渡り給ふ御心ばへの、世の人に似ぬを、「なのめならむにてだにあり、まして、かうしも、いかで」と御心とまりけり。「いとどちかくて見えむ」までは、おぼしよらず。（葵巻　323）

ここをウェーリーは次のように訳している。

> Princess Asagao could not but be touched by the rare persistency with which year after year Genji had pressed his suit. Even had he been positively ugly she would have found it hard to resist such importunity ; so small wonder if seeing him ride by in

all his splendour she marvelled that she had held out so long. But she was determined to know him much better before she committed herself.（159）

朝顔は源氏の魅力を認めながら、関わりを持つ前に彼をもっと知らねばという決然とした態度をみせているとウェーリーは解釈し、英語をおぎないつつ、「おぼしよらず」を 'be determined' と彼女の強い決意に訳している。彼女の心情を描くこの 'be determined' は、ウェーリーの朝顔解釈のキーワードでもある。そして源氏をもっと知るというのは、彼の外見の見事さでも、朝顔に懸想してくる本気さだけでもなく、彼女が源氏を受け入れ、彼を巡る女性たちの中に位置したとき、源氏が自分をどう扱うかということである。このことがより明らかになるのは、「朝顔」巻であるので、これについては「朝顔」巻で再度触れる。ここでは、源氏と彼女が「さだすぎ」てこの問題と向きあわざるを得ない関係を 'she committed herself' と彼女が考えている点を指摘するにとどめる。

この後、葵の上を亡くした源氏が悲しみの中で朝顔に便りを送る場面がある。ここでは、彼女が、悲しみに沈む源氏にほだされ、侍女たちのすすめもあって、返事を書くが、「みずからも思されければ」（葵巻　347）を 'she reached the same conclusion'（174）と源氏の手紙に返事をするのもやはり朝顔の選択と結論であるとウェーリーは解釈している。

ここまでは、斎院となる以前の式部卿宮の姫君としての朝顔であり、二人の関係には朝顔が「屈しなくてもよい」地位も可能であっただけに、彼女が自己と対峙する必要性が薄い、そんな時期であった。しかし、ここで既に朝顔はウェーリーによって、'determine' 'not submit' というキーワードで描かれている。その決意の強さは何故か、何に屈したくないのかという点については、ウェーリーの補足説明と共に、この後「朝顔」巻で明らかにされていく。

2．朝顔斎院――「賢木」巻以降

「賢木」巻で、朝顔は賀茂の斎院に選ばれる。'lady of the court' から 'priestess'（201）への変化は、彼女が実質的に源氏の手の届かない存在になるということで、彼にとっては大きな意味を持つが、朝顔の気持ちはここでは語られていない。ただ、源氏の側から見れば、この記述はやがて、この後、藤壺宮との再度の男女関係へと展開していく重要な契機と言える[12]。

さらにその後、父である桐壺院が亡くなって雲林院に籠った源氏が、紫の上と共に朝顔にも歌を送る場面が描かれる。斎院の身でありながら、朝顔が返事をするのは、日頃は決意の程を示す朝顔も、源氏のことは深く心にかけているからで、源氏が妻の葵の上を亡くした時と同じく、父桐壺院を亡くして傷心の時には、相手を思いやって返事を必ず返している。返事の中で朝顔の心理は直接的には語られていないが、このあたり、男

女関係を受け入れる気は全くないが、源氏を大切な存在であると思っている朝顔の気持ちが描かれている箇所である。

「朝顔」巻では、それまで斎院故に手の届かない存在であった朝顔が、斎院を退いて家に戻り、二人の交際が復活の兆しを見せ、そして終焉をむかえるまでが描かれる。朝顔は父桃園式部卿宮の死で、服喪のため斎院を辞し、父の屋敷に戻って叔母にあたる女五宮と暮らしている。源氏は女五宮訪問にかこつけて、朝顔を訪ねる。しかし彼女は「世づかぬ御有様は、年月にそへても、物深くのみ、ひき入り給ひて、え聞え給はぬ」（朝顔巻　254）と相変わらずのつれなさである。「世づかぬ御有様」つまり、「男女の道に心が向かないご様子」の部分をウェーリーは "her mistress become more and more aloof from the common interests　and distractions of life, and it had long distressed her to see Prince Genji's letters so often left unanswered."（386－7）と訳すことで、男女の道の意味を薄めている。しかし、返事をしてもつれないのは相変わらずで、原文の「人々も、御硯取りまかなひて、きこゆれば、」（255）をウェーリーは 'she yielded to their persuasion so far as to write the poem'（387）と訳して、単に源氏の手紙に返事を書くという行為でさえ、侍女の「説得に屈した」というふうに、朝顔に 'yield' という意識をもたせている。もっとも、ここの 'yield' は源氏に返事を書くのは侍女に勧められたからという一種のポーズとして、修辞的に用いられていると言える。それにしてもここでもウェーリーは、彼女を描くのに yield という語を用いるのである。

源氏はつれなくされてもあきらめもせずに、朝顔のもとにしげしげと通い、侍女たちも口を極めて源氏をほめる。そんな中で彼女は毅然とした態度をくずさない。

> 宮は、そのかみだに、こよなく思し離れたりしを、今は、まして、たれも思ひなかるべき御齢、おぼえにて、「はかなき、木草につけたる御返りなどの、折り過ぐさぬも、かるがるしくや取りなさるらん」など、人の物言ひを憚かり給ひつつ、うち解け給ふべき御景色もなければ、ふりがたく、おなじさまなる御心ばへを、世の人にかはり、めづらしくも、ねたくも、思ひ聞え給ふ（朝顔巻　256）

ここでは、ウェーリーは原文に特別の解釈を差し挟まず、彼女の世間の風聞を嫌う心を訳している。

> she felt that both he and she had now reached an age when such things are best put aside. She feared that even her inevitable allusions to the flowers and trees of the season might easily be misinterpreted, and even if Genji himself was under no misapprehension, there are always those who made a business of getting hold of such things and turning them to mischief, and in consequence she was careful to avoid the slightest hint of anything intimate or sentimental.（388）

彼女は、源氏は自分の気持ちを誤解しなくても、世間は誤解するのだからと、源氏につ

け込まれるようなことは極力避けている。ここでも彼女にとって、世間の噂の比重は重い。

さらに、源氏が、せめて朝顔の声の聞ける距離まで招じ入れて欲しいと言うのに対し、朝顔の心は変わらない。

「むかし、われも人も、若やかに、罪ゆるされたりし世にだに、故宮などの、心よせ思したりしを、猶,『あるまじく、恥づかし』と思ひきこえて、やみにしを。世の末にさだ過ぎ、つきなき程にて、一聲も、いと、まばゆからむ」とおぼして、さらに動きなき御心なれば、「あさましう、つらし」と、思ひ聞え給ふ。（朝顔巻262）

この「さだすぎ」というのが、斎院を退いて後の朝顔の心の原点にある。盛りを過ぎ、もう色恋沙汰の年齢ではないという意識は、移ろいゆく時のはかなさという、朝顔の花のもう一つの意味と重なる。実際、朝顔が源氏を拒否するのは、彼女は男女関係のはかなさ、もろさの方に目がいってしまって、一時的な恋愛感情にのめり込めないということも大きな要因と考えられるが、キリスト教的直線の時間を文化背景とするウェーリーは、そういう側面からの可能性を掘り下げることはしない。「さだすぎ」はそのままさらりと訳しつつ、'refuse' 'yield' という言葉と結びつけて、朝顔の心情を訳するのである。

She did not doubt the reality of his feelings ; but if at a time when they were both young enough to be forgiven a few indiscretions, when moreover her father was actually seeking to promote an alliance between them, she had <u>without a moment's hesitation</u> <u>refused</u> <u>to yield herself to him</u>—what sense could there be, now that they were both past the age to which such irresponsible gallantries by right belong, what sense (she asked herself) could there be in parleying with him, indeed, in admitting him into her presence at all ? He saw that she was <u>absolutely unmoved</u> by his appeal, and was both astonished and hurt. . (392)

「『あるまじく、恥ずかし』と思ひ聞こえて、やみにしを。」という原文は 'she had without a moment's hesitation refused to yield herself to him' という風に、相変わらず拒絶の refuse で訳され、屈したくない（refused to yield herself to him）という言葉を選んでウェーリーは朝顔を描写しているのである。ただし、ここでようやく、彼女が頑なに避けているのは世間の目ではなく、「源氏に屈すること」であるという朝顔の心の問題点がはっきりしてくる。そして、「さらに動きなき御心なれば」は 'she was absolutely unmoved by his appeal' と訳されている。

その後、ウェーリーは原文を補足する彼独自の次のような説明を入れてさらに朝顔の気持ちの解明を試みている。

As a matter of fact, she had no distaste for him whatever. His beauty delighted her and she was sure that she would have found him a most charming companion. But she was convinced that from the moment she betrayed this liking he would class her among the common ruck of his admirers and imagine that she would put up with such treatment as they were apparently content to endure. A position so humiliating she knew that she could never tolerate. She was resolute, therefore, in her determination never to allow the slightest intimacy to grow up between them. (393)

原文の間に短く挟まれたこの補足説明は、ウェーリーの朝顔解釈をよく要約している。'convince' 'resolute' 'determination' という自分の意志と決意を表す言葉、さらに 'tolerate' 出来ないこととして、'humiliating' 'class' があがっている。いずれもウェーリーがこれまで朝顔を描くときに用いてきた一連のキーワードに属する。とくにここでは、原文の訳をするという枠から離れて、まず朝顔の源氏に対する思いが確認されている。彼女にとって源氏は一緒にいると楽しい魅力的な相手であるが、彼女はこの好意を源氏に一旦悟られるや、源氏が、自分を彼の多くの恋人たちと同列にみて、彼女たちが満足して耐えている受け身的に源氏を愛しつつ共有するという扱いを、自分に対してもすると確信している。彼女はこの状態を 'a position so humiliating' ととらえる。何故屈辱的と彼女は考えるのか。そこが原文にはないウェーリーの朝顔解釈のポイントと言える。先に「葵」巻で朝顔は、源氏と男女の関係を持つことは 'she committed herself' であると考えていた。この言葉が、ここのウェーリーの補足説明と重なり合って意味を持ってくる。源氏との関わりは「自らを身動きの取れない状態に追い込む」事であり、彼女が屈辱的と考えるのはこの状況であるということが、ここに至って明らかにされる。「さだすぎ」て自己に向きあう時、源氏の意のままに翻弄されて耐える生活は、まさに彼女にとってのアイデンティティクライシスを意味する。それ故に彼女は源氏と距離を保つために源氏を拒絶するのである。決して源氏を嫌いであるからではないので、彼女は、拒絶する際には必ず受け入れたときの 'humiliating' な状況を自ら思い浮かべ、自らに警告せねばならないというのがウェーリーの解釈である。それ故、朝顔の心情描写には、'refuse' 'humiliating' という一連のキーワードが用いられているのである。周囲の眼を過度に気にかけるという、西洋人から見た日本人らしさを身にまとわせて、これまで朝顔の外見を描き続けたウェーリーが、ここにいたって、男女の愛よりは自らの自己意識を大切にする女性として、まさに西洋近代的な女性として朝顔を捉えていることが明らかになる。

「朝顔」巻で、上記の、ウェーリーの解釈の後、源氏が言い寄って朝顔が拒むという二人の関係は終わりを告げる。「乙女」の巻で、女五宮が朝顔に源氏との仲を取り持とうとするが朝顔はとりつくしまもない。「『いまさらに又世になびき侍らんも、いと、つ

きなき事になん』と聞え給ひて、はづかしげなる御気色なれば、強ひても、え聞えおもむけ給はず」（乙女巻、275）という朝顔の心の中で源氏との仲は完全に終わっている。[13] ウェーリーはここでも "'it would be a strange thing if I were now to yield, after all that has happened since, to your or anyone else's friendly persuasions." She looked so reluctant to discuss the subject further（400－401）と訳し、拒絶に関しては 'reluctant' とややおだやかだが、相変わらず 'yield...to your or anyone else's friendly persuasions' と 'yield' というキーワードで朝顔を描いている。

おわりに

以上、アーサー・ウェーリーの『源氏物語』訳を取り上げ、朝顔の心理が描かれている部分を、斎院に選ばれる以前とその後の二つに分けて、「決意」「意志」「屈さない」という一連のキーワードに着目しつつ、原文と対比して検証した。斎院に選ばれる以前の朝顔は、若さと高貴な身分と父の後ろ盾という恵まれた境遇の中で、「決意」と「強い意志」を持って、源氏を拒否し続ける。その理由について、ウェーリーは、彼女が世間の眼を気にしてそれに「屈したくない」と考えているからと解釈する。恵まれた環境にある朝顔はまだ自己と対峙して源氏拒否の理由を突き詰めて考えるに至らず、拒否の姿勢を明らかにしつつも、世間の眼を気にする女性として描かれている。キーワードの「決意」「強い意志」は斎院に選ばれて以降の後半と一貫しているが、「屈したくない」というキーワードは朝顔の意識の変化と共に、後半で変化するのである。後半の、彼女が、父の死後、斎院も辞し、「さだすぎ」て暮らす「朝顔」巻において、既に提示されていた一連のキーワードは、ウェーリーによってより明確な解釈を与えられる。彼女が「屈したくない」と表現するとき、彼女は男女の関係の中で身動きが取れなくなって自己を見失い受身的にただ耐えるしかない状態に陥りたくないのであるということが明らかにされる。紫のゆかりの女性たちを含めて、源氏物語に登場する女性たちは、源氏の積極的な行動に身動きが取れなくなっている場合がほとんどである。そういう中で、ウェーリーはこの朝顔という女性を、単に結果として源氏を拒否するという行動を取ったというだけではなく、はっきりした自己意識をもってそれを実行に移した近代的自我の確立した西洋的な女性として解釈したのである。

注

『源氏物語』のテキストは日本古典文学大系14－18（岩波書店）を、またウェーリー訳は Lady Murasaki, *The Tale of Genji*, Arthur Waley trans.（Boston, Tuttle Publishing, 2002）を用いた。本文中の引用文のページ数はこの版に拠る。

1．英語訳が幾つかある中で、部分訳だが最初の英語訳として *Genji Monogatari*, Suyematz, Kenchio trans.,（London, Trubner. 1882）が、又、最も多くの人に読まれてきた英語訳とし

ては、*The Tale of Genji*, Arthur Waley trans. と *The Tale of Genji*, Edward G. Seidensticker trans.,（New York, Alfred A. Knopf, 2004）がある。

2．今井卓爾他編、『近代の享受と海外との交流』（源氏物語講座9、勉誠社、1992）など

3．朝顔はその境遇がかわるにつれて「式部卿の姫君」「朝顔の姫君」「姫君」「斎院」「宮」と呼ばれている。源氏も官位につれて「おとど」などと呼ばれるので呼び名の変遷は『源氏物語』の中では当然であった。研究者の間でもその呼称は「朝顔の姫君」「朝顔斎院」「朝顔」など統一はされていない。本論では基本的に植物の名と混同されない場合は朝顔と呼んでいきたい。

　本論のタイトルについては、朝顔解釈とすると、源氏の恋の小道具であった植物の朝顔との混同が懸念される。朝顔の姫君か朝顔斎院のどちらかにするなら彼女の全体像として後者の属性がふさわしいと考えた。ウェーリーは基本的にプリンセス朝顔としながら、原典に習って時として呼称を変えている。

4．朝顔が最初に登場するのは、「帚木」の巻で、本論で述べたように女房たちの噂話に、自分と藤壺宮の関係が取りざたされているのではと不安に思い耳を傾けると実は朝顔との関係についてであったと述べられる。さらに、「葵」の巻で、葵の上の死の悲しみの中で歌を送るのは紫の上と朝顔であり、「朝顔」の巻で、源氏が朝顔のもとにしばしば通うのを嫉妬する紫の上が書かれ、さらに同じ巻で紫の上に藤壺宮や朝顔について語った夜、今は亡き藤壺宮の亡霊が源氏のもとに現れる。

5．福田侃子「朝顔斎院をめぐって」『東京都立大学人文学報』32号（1963）

6．斉藤暁子「紫の上の嫉妬――明石及び朝顔斎院――」『むらさき』13号（1975）

7．石坂晶子「〈異化〉の方法――朝顔巻試論」『フェリス女学院大学日文大学院紀要』7号（2000）

8．「式部卿宮の姫君に、朝顔たてまつり給ひし歌などを、少しほほゆがめて語るも聞こゆ。『くつろぎがましく、歌誦しがちにもあるかな』と、『猶、見劣りはしなんかし』とおぼす。」（帚木巻　90）

9．このため、藤原定家は「かかやく日ノ宮」などの欠巻を想定した。（藤原定家『源氏物語奥入』）

10．二人の関係を肯定するのは、鈴木日出夫「朝顔・夕顔」『源氏物語歳時記』（筑摩書房、1989）それに疑問を呈するのは原岡文子「朝顔の姫君」『国文学』（1991・5）

11．*The Tale of Genji* Edward G. Seidensticker trans., 159.

12．「斎院は、御服にて、おり居給ひにしかば、朝顔の姫君は、かはりに居給ひにき。賀茂のいつきには、そむ王の居給ふ例、多くもあらざりけれど、さるべき女御子や、おはせざりけん。大将、年月ふれど、猶、御心、はなれ給はざりつるを、かう、すぢことになり給ひぬれば、『口惜しく』とおぼす。中将に、おとづれ給ふ事も、おなじ事にて、御文などは、絶えざるべし。昔にかはる御ありさまなどをば、殊に何とも思したらず、かやうの、はかなき事どもを、まぎるる事なきままに，こなたかなたに、おぼし悩めり。」（賢木巻　381）

13．この後朝顔の心理が語られることはなく、「梅が枝」巻で、明石の姫君入内にあたっての準備として、香を合わせたり書の手本を書いたりするのを源氏が朝顔に頼み、見事な品が朝顔より届けられ源氏が誉める場面があるが、源氏の側からの描写のみである。同じく「若菜下」の巻で四十七歳の源氏が、過去を振り返って朝顔は素晴らしい女性だったと紫の上に語る場面があるがここも一方的に源氏の側の記述だけである。